

## 第38回日本木材学会大会の概要

大久保 勲



大会会場の北海道東海大学

昭和63年7月19日から21日の3日間、旭川市で第38回日本木材学会大会が開催されました。木材学会大会は1年交替で東京と京都で開催されています。このほか、ときどき九州とか静岡など別の地域で行われています。北海道では約10年毎に開催されています。旭川市での木材学会大会は前回の昭和35年に続いて28年ぶりのこととなります。

大会のメイン会場は北海道東海大学で、研究会の一部を林産試験場で開催しました。北海道の北部、旭川市での大会ということで、参加者も例年より減少するのではないかと心配でした。

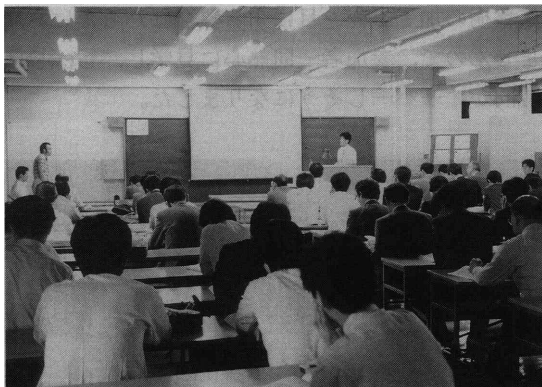
しかし、大会が開催されてみると、これが大成功でした。大会参加者は830名で、これまでの最大規模の大会となりました。

大会では、総会、研究発表、特別シンポジウム、研究会、特別展示、林産試験場見学会などの行事がありました。それにポスト大会としてエクスカージョンも企画されました。

### 研究発表

研究発表は9会場で製材・機械加工、保存、物性、居住性、強度・木質構造、組織培養・材形成、

合板・ボード類、きのこ、セルロース・ヘミセルロース、化学加工、接着・接着剤、パルプ・紙、抽出成分、微量成分・リグニン、乾燥、熱分解、材質、組織構造の18部門、455件ありました。これは予想を大幅に超え、東海大学の施設の関係で発表会場を増やすことが出来なかったため、発表時間を当初の20分から15分に短縮して対処せざるを得ませんでした。また、展示発表が20件ありました。これはポスターやサンプルを展示するもので、多くの人々が発表者と熱心なディスカッションを交わしておりました。



### 特別シンポジウム

特別シンポジウムは総合テーマを「木とデザイン」とし、個別テーマ 木造建築とデザイン 木製家具とデザインということで総会のあと開催されました。木造建築とデザインでは一色設計事務所納賀雄嗣氏が話題提供を行いました。納賀氏は近年全国で建設されるようになってきた大規模な木造建築の設計に数多く関わっていますが、最近の作品を紹介しながら、乾燥材の供給体制などの問題点や木造建築の可能性について述べられました。木製家具とデザインではインテリアセンター長原実氏が話題提供されました。長原氏は長年にわたり旭川市で家具の製作を手掛けられ、近年は総合インテリア関係の会社の経営もされています。長原氏はヨーロッパにおける家具の歴史と日本の場合の対比を述べ、これから日本においてもデザインがより重要になり、さらに需要者が家具やインテリアに求めるものを的確に把握することが必

1988年11月号

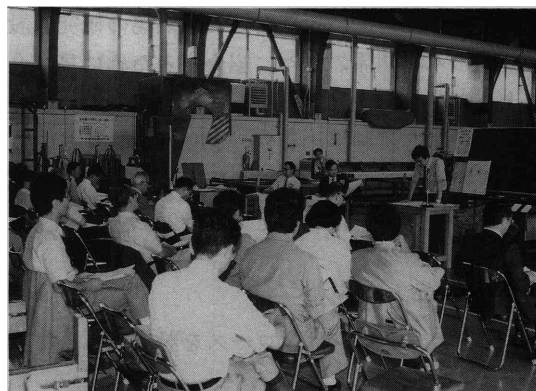
要であることを強調されました。その後、北大の宮島教授の総合司会によりコメンター二人を含めて活発な質疑討論が交わされ、盛会のうちに終了しました。特別シンポジウムの参加者は430名でした。



### 研究会

研究会は大会最終日に東海大学と林産試験場で開催されました。

東海大学では抽出成分と木材利用研究会シンポジウム「木の色・香り」、生物劣化研究会、日本木材加工技術協会木材保存部会、日本木材保存協会共催講演会「北方型住宅と耐久性」、木材接着研究会シンポジウム「接着技術の実用化とその性能評価」が、林産試験場ではバイオマス変換研究会、パルプ・紙研究会共催シンポジウム「木材成分の高度利用」、木材切削研究会、日本木材加工技術協会製材・機械加工部会共催講演会「北海道立林産試験場における木材加工研究」、木材強



度・木質構造研究会，居住性研究会共催シンポジウム「北林産試における寒地住宅への取り組みについて」が開催されました。このほか，組織と材質研究会「大雪山国立公園 - 原始林と旭岳」，きのこ研究会「北海道における食用きのこ栽培の現況」と題した見学会が行われました。

## 特別展示

特別展示では積雪寒冷地での高断熱，高気密木製サッシということで3社，優良広葉樹を生かした家具5社，ウッドクラフト15社の出展がありました。家具やサッシのデザインや加工技術，材料などが注目されていました。ウッドクラフトではロクロの実演に人気があつまりました。

また，北海道東海大学所蔵の世界的に著名なデザイナーによるいすのコレクションも大学図書館の地下ギャラリーにて展示されました。



## 林産試験場見学会

林産試験場が昭和61年12月に旭川市西神楽に新築・移転したので，新装なった試験場の研究施設を全国の木材関係の方々を紹介するために見学会を大会期間中の2日間実施しました。メイン会場の東海大学と試験場の距離が15 kmと離れているので，連絡シャトルバスを準備しました。見学会で試験場においでになった方々は200名でした。

## エクスカージョン

エクスカージョンは2コースを設定しました。

一つは「北海道の色，味，香り」と題して中富良野のラベンダー，富良野ワイン工場，氷点で有名になった旭川営林支局見本林，優佳良織工芸館・国際染色美術館のコースで参加者は40名でした。おりからラベンダーの花が真っ盛りで，天気にも恵まれ大雪山，十勝岳，芦別岳がのぞまれ参加者に非常に喜ばれました。もう一つのコースは「北海道産広葉樹の川上から川下まで」と題して旭川市郊外の嵐山広葉樹林，市内のフローリング，家具，ツキ板，クラフト 製材，乾燥，集成材の各工場に参加者は46名でした。北海道以外では道産広葉樹の加工工程を目にする機会がめったにありませんので，参加者一同熱心に見学し，しばしば時間がオーバーしそうになりました。



大会期間中に多くの研究者や大学の先生のほかに民間企業からの参加が目立ちました。久し振りの北海道での大会ということで，地元の企業の関心が高かったものと思われます。忙しい企業活動のかたわら，このような最先端の木材研究の現状にも目をむけられることは今後の木材産業の発展に大きく寄与することになると考えられます。木材学会は学者や研究者だけでなく産業界も一緒になって木材学の発展をはかることを目的としています。この意味からも民間企業の方々の参加の多かった今回の大会は大成功であったといえます。

(林産試験場 性能部)